

「東アジア人文研究討論会派遣参加報告書」

京都大学文学研究科博士課程1年(堀川 泉)

プログラム内容

本プログラムは、復旦大学、香港城市大学、京都大学の3大学で人文学を研究する博士課程の学生が、各自のテーマで研究発表し、分野横断的に議論を行い、理解を深めることを趣旨とするワークショップである。上海の復旦大学での今回の開催が、7度目となる。大学内での研究発表に加え、巡検も実施された。京都大学所蔵の歴史資料である「苗蛮図」に関して、3大学は合同で研究を行っており、その報告も行われた。

海外での経験

海外での研究発表に参加するのは初めてのことで、自分の研究について英語で発表し、英語で質疑応答するという、研究者として基本中の基本ともいえる一連の流れを経験することができた。他の発表者の中国語や英語での研究発表は、文学や哲学、歴史に関するものが中心で、普段は聞くことのない、自分とは異なる分野の研究について知ることができた。英語を使って、あるいは日本語のできる中国人留学生を介して、上海や香港の大学院生と交流したことも意義深く、日本とは異なる環境で行っている学生たちが、どのような日々を送り、どのようなことを考えているのか知ることができ、大変刺激的だった。日本と中国での文化や慣習の違いについて話し合ったことも興味深かった。

学習成果

日本が好きで、日本語のできる海外の学生は勿論そうであるが、日本語のできない学生も、英語を使って積極的にコミュニケーションを取ろうとしてくれたことが印象的だった。これまで、自分には「自分の英語は通じない」という変な思い込みがあったようで、英語でのコミュニケーションをなるべく避けたいと考えている節があった。けれども今回の派遣で、研究発表での質疑応答や、巡検中の交流などにおいて、それなりに英語でコミュニケーションを取ることができたため、自分の英語にある程度自信を持つことができるようになった。もう1点、これはとても個人的な感想にはなるが、自分は高校の修学旅行で11年前に上海に行った経験があり、その時からの街の変化が極めて大きく、11年間の上海の経済成長を肌で感じ取ることができた思いである。一層近代的で、魅力的になった上海を見て、中国という国に純粋に興味湧き、これまで全く学習経験のない中国語にも、取り組んでみたいと思うようになった。

進路への影響について

今後、人文学を研究していく上では、研究や発表において海外に出ていくことが必須であり、異なる文化的背景を持つ人々とコミュニケーションを取ることが求められる。その際には、言語に不安があっても臆せず意思疎通を図ろうと努力する姿勢が肝要であるが、日本にいてはそういった必要に迫られる機会はなかなか訪れず、いつまで経っても心構えができないままとなってしまう。その意味で、今回の派遣は、今後研究者を目指す中での、外国語でのコミュニケーション練習の貴重な機会になった。